

句
遊

第五集

平成十五年三月

序に代えて

三宅 申

ここに、「句遊」第五集を刊行いたします。早いもので、平成五年三月に第一集を出してから八年を閲みすることとなりました。

「句遊」ということばは、まことに味わい深いものと思っております。どの俳句結社にも捕われず、自由に句を作り発表することを主眼として会は発足しました。爾来そこから生じる、あたたかいが活発な会として続いています。

「遊」は単に遊ぶということではなく、例えば「遊学」という場合は、生まれ故郷を離れて他国へ学問にゆく、との意味合いがあります。法華経には「遊戯」の言葉が何回も出てきますが、自由自在に往來し何ものにも束縛されないことを意味するといわれます。

平安時代末期の「梁塵秘抄」の有名な一節に、「遊びをせむとや生れけむ、戯れせむとや生れけむ」とあります。「句遊」は「句悠」でもあります。われわ

れは、残された人生を悠々と楽しんで送りたいとの願いを以て、俳句とつき合っています。いうまでもなく、俳句は世界で最も短かい詩であり、これに倣い海外でも英佛独語などで短詩として盛んに詠まれています。

吉村さんが第一集の序で書かれていましたように、江戸時代以来「業俳」と「遊俳」という言葉があります。ある著名な俳人は、教養として俳句をたしなむ「遊俳」について、その宜しさを語っています。ここに出ております作品は一色に染まらず、多岐に及んでおります。読者の皆様はどうか本集を楽しんでいただき、今後とも「句遊」を応援して下さいば、これに過ぎるものではありません。

(付 記)

平成十一年、十二年度句遊会の活動状況

月例会、平成十三年三月が第一三二回

写友会、画友会との合同展 平成十一年十一月

同 平成十二年十月

吟行句会 平成十二年七月

入谷鬼子母神朝顔市

目次

襟裳岬	春の雪	鰯雲	道長し	貴晩晴	真珠星	托鉢	花八つ手	団十郎	箱根の四季(五)	水温む	白木槿	旅衣	遠く江の島を
吉村正	宮川弘道	三宅申	藤川道夫	林泰亀	長谷川草洲	生江沢広雄	中路素童	田中保一郎	武井治	勝賀瀬ゆうじ	岩瀬登	石野喜双	青木忠美
……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……
三二	三〇	二八	二六	二四	二二	二〇	一八	一六	一四	一二	一〇	八	六

作

品

五

遠く江の島を

青木忠美

雛壇に出迎えられて伊豆の宿

江の島や朧の中に島一つ

久しぶり夜の銀座の薄暑かな

更衣へ古稀をすぎてもしやれ心

かたつむり真似て余生をのんびりと

梅雨明けも間近となりて旅のこと

一族の塚の跡とや夏木立

肩書をすべてはずして甚平着る

団扇手に友待つ宵や浜の駅

ほつとしたにがき思ひ出終戦忌

少年にかへり蜻蛉追つてみる

渡り鳥江の島越える六羽かな

今置きし物を探すや秋の夜

立冬の十和田に老いの小さき旅

枯葉舞ふ鎌倉山のパンの店

初時雨余生を静かにぬらしゆく

振りむけば来し方遙か枯葉舞ふ

菰の雪重くはないか寒牡丹

旅衣

八

石野喜双

薄紙に梅をひとひら臥す人へ

旅衣支度に迷ふ余寒かな

お酒より団子が売れる花見茶屋

灯台へ道を残して卯波かな

買ひおきし傘を試さん走り梅雨

中継に一喜一憂扇子ゆれ

甲板の灯を消し銀河ほしいまま

朝顔に境内とられ鬼子母神

玉音の届かぬところ蟬時雨

俱会一処苑を縁取る花木槿

酌むを休め歌に酔ふべし十三夜

鳥渡る新空港は日に二便

撫肩を少しいからせ林檎むく

花八つ手日だまりが好き路地が好き

枯草や土より出でて土に帰す

着ぶくれの客入替はり屋台酒

年忘れ居残り組のいくさ歌

窓のなき最高裁や寒に入る

白木槿

岩瀬登

一〇

友移転あの辛夷とも別れしか

車輪梅初めて訪う大巧寺

行列や振向く先に新茶賣り

頑張れや虫の死骸を引く蟻よ

松根油取りつ迎えし終戦日

敗戦忌忘れがちなり亡兄の顔

小雨降る墓地を彩る白木槿

恨めしや朝顔市の俄か雨

秋の夜を妻は旅路や独り酌む

羊かんの栗の大きさ較べ合う

木の実植え新世紀への願い込め

キャンパスの思い出遠し銀杏散る

冬寒し心づくしの蜜柑風呂

魚河岸の雑踏の中着ぶくれて

鐘の音二日ばかりの初湯かな

鶯替えて今年こそはの神頼み

雀鳴く庭をいろどる寒椿

タクシーを待つ列長し雪しまく

水 温 む

勝賀瀬ゆうじ

春寒や出るに
出られぬ家に在り

下萌を箒の先に
たしかめり

女声して春灯の
消えにけり

ポンコツの車洗ひや
水温む

今様の七里ヶ浜の燕

することもせず
に長閑や一人旅

色紙買う姉妹の
老いし天の川

かなかなや海へ
向きたる寺庇

寺町や蜻蛉二匹西へ行く

秋風や日経紙讀む膝に猫

齒をかえてかじる林檎の音高し

渡り鳥大きく見えて失せにけり

何の木か知らぬ根元で栗拾う

短日の妻のあとから硝子拭く

枯草の山築きあげ帽子脱ぐ

着ぶくれて昨日のことを忘れけり

戦友会軍歌まじえし年収め

首すくめ軽き足どり寒の入り

箱根の四季（五）

一四

武井治

暫くは太古の如し初み空

外輪の冴ゆる山並み寒昂

杉伐りし谷が匂ひて寒の入

バス停の日溜るところ春隣り

苔庭の幽かな息吹き春の立つ

三楹の蕾愛しと修道女

手に易し浅き流れの春の水

生ありて又片栗の咲くに逢ふ

妻ありて八十路の春を面白く

五月晴れ気負ひし後の疲れ濃く

芽吹く山墨絵となりし俄雨

夏の川燕返しの竿が鳴る

流木の留るところ夏の果

送り火に屈む母子の影法師

秋冷えや羽撃き落ちる蝉一つ

落葉焚く我も枯葉の色に似て

かく枯れて尚美しき烏瓜

手入れして庭の明るき冬構

団 十 郎

一六

田 中 保 一 郎

川底に小さな生命春浅し

初燕川の流れに沿うて来ぬ

朧夜やコンビニに買う赤ワイン

紅梅や海の風来る切り通し

置竿の糸きらめきて春の水

吾れも買ひ妻も買ひ来し柏餅

時として空仰ぐなりかたつむり

鉢植の並ぶ小路や若葉風

黒雲の迫るや疾し夏の川

起き抜けの牛乳旨し雲の峰

水打つて急に静かになりし路地

白萩に風こまやかな夜となれり

朝顔に団十郎とは大袈裟か

ひとり居の吾樂します天の川

石路の花連絡船の気笛鳴る

ブルドーザー残りし川原寒の入

冬はじめ病室のドア―そつと開け

江の電や思ひ思ひの冬帽子

花 八 つ 手

一八

中 路 素 童

どんど焚く繚乱の世に炎上げ

花開き舫ひ解かるる屋形船

燕の巢軒に乾きし塩の道

初蝶来よ野を行く吾のあとさきに

春灯骨董市のギター濡れ

終ひ船待つ出稼ぎの島か暑

でで虫の角によつきりと西東

献木の部隊名朽ち花は葉に

離宮噴水思ひ思ひの姿創る

三伏や籠りしままの神輿庫

地震続く島を守りて夏終る

権現の丹の廊古りて萩の風

霧残し山より明ける甲斐の国

石路咲きて戦火は知らず尼の寺

蜜柑むくマニキュアの指もどかしく

横町に銭湯残る花八つ手

日の移る明治の館蔦枯れて

渡船場跡茫々として寒に入る

托鉢

生江沢広雄

居酒屋の一輪差しや猫柳

梅咲くや山を負ひたる磨崖仏

退院の挨拶終り春の風

目刺干す江の電きしむ店の前

花こぶしみ仏の背に影写し

春燈や昔ばなしの写真帳

万緑や史跡めぐりのにぎり飯

白扇や徳利に変わり箸になり

宅急便朝顔市を走り抜け

買はぬひと朝顔市の写真撮り

虹の橋くぐりし鳥の失せにけり

虎尾草や荒ぶる海に佐渡浮かぶ

鴟高音淋しき山の谷の橋

本に伏し夢ひろがりぬ秋の夜

白壁に影おとしをり吊し柿

托鉢の僧の吐く息冬に入る

馳走なり時頼涙す根深汁

妻もまた一病息災年忘

真 珠 星

一三二

長 谷 川 草 洲

蚯蚓出て岩這ふ雨の山路かな

便追や雨強ければ声高め

月見草岨にとどまる雨後の雲

小望月離れて一つ真珠星

残る虫枕木積める駅舎裏

打たれたる鮭血の滲み砂まみれ

農婦座す畦小走りに冬鶉

雪の日は土間に吊り変へ凍大根

風花や伐られ散らばり山の杉

熊の皮吊るす山家に飾り雛

下萌や貝殻つきの浮標積まれ

池埋めし土砂に突き出て蘆のと

えご落花敷きつめ雨の志賀旧居

谷卯木咲くまままじり土砂崩れ

屋根落ちし製錬棟に西日さす

支柱より音たて崩れホップ刈り

ひと風に杭のトンぼう入れ替はる

鳥渡る残照消えぬ雲を指し

貴 晚 晴

二四

林 泰 亀

山路来て喉うるほすや春の水

川底に何やら動き水温む

赤白の園児の列や草青む

卯の花の咲く頃淡き恋をせし（昭和十九年学徒動員中）

乙女らの胸のふくらみ街薄暑

母ならん水子の像に柏餅

曇り空朝顔市にいなせな娘

泡盛を重ねつ老童國憂う

瘦せこけし写真に見入る敗戦忌

全山にリズム宜しく蟬しぐれ

菖蒲咲く川に棹さす潮来笠

健闘の球児の涙夏の雲

秋灯や孫得意気に手品する

立冬や寅さんに似し露天商

通りざま蜜柑の香り若女将

枯葉舞ふ園にひっそり雨情の碑

餌求め鳥も厳しき寒の入

余寒なおピーポ・ピーポの音走る

道 長 し

藤 川 道 夫

年賀状添へ書きに喜寿祝ひ合ひ

賽銭を踏む道長し初詣

困ひ内貴婦人然と寒牡丹

つい声を掛けたき梅の蕾かな

初蝶を見しことを先づあいさつに

足許で草動きけり春の水

吹く風を見送る如く辛夷ゆれ

入試パス伝へる携帯電話かな

鷹揚に姉に分けたり柏餅

春の陽のまぶしすぎたる野辺送り

庭すみに暮れ残されしさつきかな

緑陰の香の殊によき無為の午後

暑き日や病牀六尺読み厭かず

複眼をギョロリまわしてトンボ逃げ

蜻蛉の羽の葉は脆かりき

天高し三百年の杉木立

つわの花代表で風に揺れ

着ぶくれし背に陽光のガラス越し

翮 雲

三宅 申

初蝶の図書館にまで蹤ききたる

朝より竹騒ぎをり新茶汲む

朝顔市造花の付きし守り札

やはりと失言を消す扇子かな

飛石に色を残して青蜥蜴

しまなみの海道はるか雲の峰

こころ足る日なり果てなき翮雲

山ふかき遠流の屋敷赤とんぼ

長旅を戻るや雨の白木槿

般若寺の道ふさぎけり萩と猫

蔵の窓開かれみたり曼珠沙華

漱石の墓にこぼるる黄菊かな

それぞれに杭背伸びする水の秋

時計台暮るる早さよ石露明り

寒に入る骨董市の白磁かな

濤をひく鴨あり廻る鴨もあり

枯蓮や読み人知れぬ歌碑ひとつ

酉の市手締めを仕切る老おかみ

春の雪

三〇

宮川弘道

吊り繪馬の大騒ぎして春一番

寄席はねて焼鳥横丁春の雪

恋猫の人目を避けるふり見せず

あやふやな友の禁煙山笑ふ

岬より白帆見てゐる遍路杖

葉桜の影から影へ乳母車

どくだみの匂ひまとゐて庭手入れ

核の威を誇る國あり五月闇

新涼や賽の目に切る絹豆腐

異國語の飛び交ふ船や夜の秋

星月夜駱駝に乗りて鳴砂きく

四万十川の底まで透けて曼珠沙華

天の川渡りて妻よ帰り来よ

児の肩に芒の絮のきて止まる

しぐるるや堅田へおりる鷺一羽

落葉して雲の速さの見ゆるかな

山の影山にうつして日短

赤き実の土にこぼれて青木の実

襟 裳 岬

吉 村 正

雛古りぬ口紅の色褪せぬまま

言葉選ぶごとと白梅の花開く

旅人となりたし風も朧にて

春愁ひ仏も耳ろしたまへる

三鬼忌やむかし算盤五つ玉

あんぱんのほど良き甘さ風薫る

築に狩る鮎に草の香日暮れぬる

牛蛙ぶしつけに鳴き雨あがる

鍔ひろき帽子かぶるや夏来たる

抱く膝のややに冷たき居待月

身に打ちて鍼をたのみの秋ひでり

雨にして陸の涯や海猫舞へり

花芒おのれ愉しみ吹かれをり

十二月八日蘇枋に返り花

琅玕の幹の冷たき近松忌

荒草も刺草もはや枯に入る

花終つつましかりし母の生

着ぶくれて此の世の義理を忘れをり

あとがき

「句遊」第五集をお届けします。

十年一昔と言いますが、「句遊会」創立後十一年、句集創刊後八年目となり、同時に本集が新世紀の第一集となります。

本集への出句は十四名で、前集より四名減となりました。これからまた、新会員を増やさなければと思っております。皆様のご勧誘ご支援をお願いいたします。

ここ三年ほど、吟行句会を行っておりませんが、平成十二年七月、久しぶりに吟行いたしました。場所は入谷鬼子母神の朝顔市です。本年も是非行いたいと思っております。

編集に当り、出句は前集同様、自選十八句としました。また前書き、ルビは原則としてつけぬことといたしましたのでご了承下さい。

次集第六集は平成十五年を予定しております。

次の十年に向かい、皆様の一層のご精進とご健吟を祈念いたします。

編集委員

石野 喜次
勝賀瀬雄次
中路 良昭
吉村 正

平成十三年三月

(中路 良昭記)